

日本歴史地理学会と吉田東伍 下

廣 木 尚

2. 日本歴史地理学会の吉田東伍

日本歴史地理学会の顔

日本歴史地理研究会の創立に際し、吉田東伍は「学識名望一世に秀でたる貴顕碩学」〔史学雑誌記者に謝す〕（二一四）の一人として二〇人の賛成員（一九〇七年より特別会員）に加わった。創立後、しばらくの間は、月々の談話会や例会にも頻繁に出席し、会員の談話や旅行談に接する機会を持ったことが『歴史地理』の彙報欄から確認できる。一九〇三年二月、小林庄次郎の退会に伴い、『歴史地理』の編集担当幹事が岡部精一に交代すると、吉田も編集顧問となって同誌の編集に従事した（「本会記事」〔四一三〕）。

一九〇四年六月に編集顧問が廃止された後も、吉田は顧問として引き続き役員にとどまった（「規則上の改正」〔六一七〕）。

この時、吉田とともに顧問の地位にあったのは、小杉楹邨・大森金五郎・岡部精一・喜田貞吉・原秀四郎・堀田璋左右・藤田明の七名で、賛成員で喜田の同郷の先学でもあった小杉の他は、いずれも創立発起人をつとめた東京帝大國史科出身者だった。その後も、常置委員、評議員として終生同会の役員を担った吉田は、発起人以外では突出して日本歴史地理学会の運営に深く関わった人物だったといえる。

同会創立の頃は、吉田個人も歴史研究者としての節目にさしかかっていた。一九〇〇年からは畢生の名著である『大日本地名辞書』の刊行がはじまり、翌一九〇一年には喜田貞吉の後を受けて東京専門学校（翌年、早稲田大学に改称）講師に就任。以後、没するまで同校で教鞭をとることとなる。日本歴史地理学会の中心的存在として、早大の専任教員として、二〇世紀の到来とともに吉田はその生涯でもっとも多忙かつ多産な時期を迎えた。

吉田の日本歴史地理学会への関与はもちろん会務のみにとどまらない。夏期講演会をはじめとする各種講演会の人気講師であり、『歴史地理』に多くの論稿を掲載した吉田は、同会の対外的な「顔」の一人でもあった。

講演活動では、早くも一九〇一年四月の第二回通俗講演会で、坪井正五郎、志賀重昂とともに登壇し、「尾濃平野の地変に付て」と題する講演を行っている（第二回歴史地理通俗講演会）（三一―一）。一九〇七年からはじまる夏期講演会でもほぼ毎回講師をつとめた。講師陣の中での吉田の立ち位置は、閉会式で講師総代として挨拶するといった事例から察することができる（第二回夏期講演会記事）（一四―一三）。

毎回開催地を移して行われる夏期講演会のプログラムは、その土地に因んだ演題を順序よく並べ、系統的に構成することが求められた。講師は日本歴史地理学会の側でテーマにあった学者に割り当てて依頼する慣例だったが、当然、「振り当てが面倒で、誰も引き受け手がないといふ難題」も発生する。そのような時、頼りになるのが吉田だった。吉田が担当した演題は「重に地理に関はつたもので莊園制度とか知行制度とか或は又郷土料理に関係したもので

あるとか、何時も難問題であつた。けれども該博なる知識を有せらるゝ君は何時でも快く之を承知してくれた」という。『大日本地名辞書』の刊行により、吉田の名声は世に轟いていたから、開催地の側でも吉田の登壇を求める声が多かつた。²⁾一九一七年八月の米子と神戸の講演会を、吉田は子息の重病のため欠席したのだが、それを聞いた開催地の主催者は「他の方ならばともかく、吉田先生の御欠席ではと、甚しく失望せられた」らしい（以上、大森金五郎「吉田博士を憶ふ」〈高橋源一郎編「吉田東伍追懷録」一九一九年〉、喜田貞吉「吉田博士を憶ふ」〈三二一四〉³⁾。夏期講演会以外に頻繁に出張講演に赴いていることから、吉田の評判はうかがえる。⁴⁾

次に『歴史地理』掲載の論稿についてみてみよう。吉田の名前で掲載された最初の論稿は「高津宮址 附難波堀江」(二二二)で、前節で触れた「偽遺跡」批判の一環に位置づけられるものである。一八九九年、大阪府は仁徳天皇一五〇〇年大祭を行うにあたり、その都である難波高津宮の所在地を推定し、そこに「高津宮址」の碑を建立した。吉田の論稿はこれに批判を加えたものである。大阪府の推定は木村一郎らの説に基づくもので、仁徳天皇が開鑿したとされる難波堀江を大阪城南にある空堀のことだとし、高津宮はその南、現在の大阪市天王寺区東部一帯にあつたとしていた。これに対し吉田は、難波堀江があつたのは、大阪城のある上町台地の北を流れる天満川（大川）だとした。淀川・大和川・河内川などとの合流地点に泥砂が堆積して氾濫を起すため、それを防ぐために難波堀江が開鑿されたというのが吉田の推定である。吉田は、大阪府が難波堀江だとしたのは大阪城の外堀跡であり、したがって、難波堀江の南にあるされる高津宮の推定も誤りだとした。

吉田は『日本書紀』など諸史料から典拠を示して自論を説き、また、大阪府の推定地付近で、延暦年間に行われたものの失敗した水害対策工事の例を引証して、大阪府の推定は成り立たないとした。空堀が難波堀江であれば開鑿工事が失敗するはずはないというのである。治水の歴史についての該博な知識には、後述する吉田の歴史地理研究の特

色をうかがうことができよう。

吉田の批判にあわせて、同じ号では小林庄次郎が、史跡の「顕彰」を優先して「研究」をおろそかにした大阪府の姿勢を糾し（麻郷「史跡顕彰に先たつ研究」(二二二)、二巻四号では、喜田貞吉が、現地を訪れることもなく、結果的に大阪府にお墨付きを与える形になった本居豊頼ら東京在住の「大家」を暗に批判して、「古蹟につき精確なる知識を得んには、たとへ脳裏万巻の書を蔵するあるも必ず身親ら其境に臨まざるべからず」と、実地調査の重要性を説いた(呦々子「あ、高津宮址(高津御宮跡取調書を読む)」(二二四)。さらに、その次の号では、会員の原秀四郎が「大阪高津宮址擬定地附近の実地踏査の為」、出張することが報じられている(「本会記事」(二二五)。高津宮址をめぐる検証活動は、創立まもない日本歴史地理研究会が、その学問的正当性のために会を挙げて取り組んだ事案であった。他方、『歴史地理』誌上で「一種のInspirationを以て史蹟を判定するもの」(「木村一郎氏」(二二一)、「臆断妄見」(前掲「史跡顕彰に先たつ研究」)と糾弾された木村が「罵詈譏諷の数回のはがき」(前掲「あ、高津宮址(高津御宮跡取調書を読む)」)を寄せたことは前述の通りである。

喜田貞吉によれば、吉田の「高津宮址 附難波堀江」は、「自分は其の説(大阪府の高津宮址の推定)に関する君の意見を徴した所が、一言の下にそれは間違つて居るといはれる。然らば其の批評をと求めたが、多忙だと云ふので、例の地名辞書の校正刷の其の條を渡された。それを自分が勝手に切りはぎして作り上げたのがあの文である」(前掲「吉田博士を憶ふ」ということ)で、『大日本地名辞書』での吉田の考証をもとに、喜田が執筆したものだ。とはいへ、初期の日本歴史地理学会が注力した「偽遺跡」批判において、吉田の考証が有力な論拠となっていたことは間違いない。

歴史の「応用」への態度

一世代下の幹事たちとともに会務に従事し、請われれば引き受け手のない演題も担当する。「偽遺跡」批判への取り組みには自らの考証の成果を提供する。前項で紹介した事例からは、日本歴史地理学会の活動を献身的に支えた吉田の姿が浮かび上がる。このような同会に対する吉田の深いコミットメントは、いかなる問題関心に由来していたのだろうか。吉田が短期間ながら『歴史地理』の編集に携わっていたことは前述した。その際、吉田はかつて『読売新聞』紙上で用いた「落後生」の筆名で、いくつかの時評を著わしている。その内容から吉田の動機を探ってみたい。

復活した落後生は『歴史地理』でも『読売新聞』時代と変わらない戦闘的で鋭利な議論を展開した。「武士道」が喧伝される世情に触れ、「武士道」に対する誤解を指摘して、その「安売」と「濫用」に警告を発したり（「武士道を安売する勿れ」〈四一九〉）、地名について、明治以降の行政による「無法にして乱雑なる変改」を批判する（「地名の濫造（国語調査会へ訴ふ）」〈同号〉）といったようである。

かつてと同様、「国体」にかかわる事柄への果敢な踏み込みもみせた。「神代の新研究と云ふ事」（四一〇）では、『国学院雑誌』掲載の論文が、神代史の研究をタブー視する風潮を批判しているのをみつけて、かつて久米邦武の論文「神道は祭天の古俗」に対して、「国学者」たちが「競ひかかつて此研究を妨害し、時の政府と相呼応じて其權威を宣べた」ことを持ち出して、いま、『国学院雑誌』に久米の新研究を掲載し、国学院の講座に「久米氏を招致するの雅量ありや」と迫った。「神話の研究」（四一一）では、記紀神話の中に歴史的事実を探りあてようとする研究を「無益の努力」と断言し、また、「神代史の研究と、神社の疑問」（同号）では、「神仏混交」という「国史上の一大事実」や、神社を非宗教とする現行の制度を踏まえ、現在の「神社は殆全く其旧靈威、旧信仰を失ふて居る」と言い切ってみせた。

他にも、「楠公北忠」説につきて」（同号）では、楠木正成が実は「北朝の忠臣」であったとの俗説を紹介し、それを、南朝ではなく北朝が存続したという事実と、「南朝忠臣」楠木正成を顕彰することとの矛盾を「調和」させるための「手段」だとした上で、錯綜した「国家とか社会とか世界とか」の営みに「眼識の及ばざる名教論者」を問題視している。この論法には、後の南北朝正閏問題で少数派の北朝正統論を堂々と展開する吉田の態度が予見されている。また、「証拠物件の焚毀」（四―一二）では、伊藤博文が日記を焼き捨てたとの風聞を取り上げて、「日記が心に懸る位ならば、初より書かぬが善かるべし」と切つて捨てた。

このように、落後生Ⅱ吉田は、短期間のうちに、歴史の歪曲・悪用と判断される事例を次々と俎上にのせ、ほとんど挑発的ともいえる筆致で批判した。「国体主義とか、日本主義」といった「応用論、利用論」（前掲「神代史の研究と、神社の疑問」）によって、「武士道」や「楠公」が「濫用」されることへの強い危機感は、裏を返せば、吉田が歴史を現実に「応用」することの効果に意識的だったことを意味する。それゆえ吉田は、自らの史論をもって社会の歴史認識を是正し、研究成果を積極的に発信していったのだといえよう。

歴史の「応用」を重視する吉田の姿勢は、歴史と現実の結節点としての現代史Ⅱ明治史を重視する態度ももたらした。「明治史」（四―一二）では、「明治史の大著作」がないことを問題視し、現在の歴史学の「古い古い化石の様な者に多く注目して、謂ゆるナマボトケに手を触る、ことを好まぬ傾向」を、「時代の偏癖」と批判している。吉田は「ナマボトケでも、現ナマの人物でも、之に食つて掛かるが現当の試験である」といい、歴史研究者がリスクを恐れずに現代史の研究に挑戦すべきだと主張したのである。

吉田が現代史を重視するのは、歴史が一般に期待される「国民的情感の修養」（明治史の要求）（五―二二）といった教化的側面だけでなく、より実用的な効用を発揮しうるからである。例えば、吉田は、日露戦後のポーツマス条約の

結果、日本の樺太領有が南半分にとどまったことを惜しみ、講和会議の不調の一因を、「樺太領有の旧国史が、頗る晦昧に属する」からだとした。樺太の帰属に関する歴史の経緯について、日本側がロシアを説得するだけの理解を持ちあわせていなかったことが、日本に不利な結果をもたらした原因だといっているのである。吉田は「吾人は、常に「史は死なり」との冷罵を被むれる」が、「今や、死せる歴史が、ポーツマウス会議に崇を為して、我帝国に報ゆるに、かくの如く深酷ならんとは、世の思ひ到らざる処ならん」と述べ、歴史の研究や教育を無用視する風潮が、国家に直接的な不利益をもたらしたことを指摘したのだった（以上、吉田「講和会議録に見ゆる樺太領有事跡の論」〔八一三・四〕）。このように、歴史の実用的な有効性を確信する吉田は、日本歴史地理学会の「史学は死学にあらず」とする立場を代表する存在だったといえる。

この後、吉田は明治史の先駆的著作である『維新史八講』（富山房、一九一〇年）や、現代から遡行する実験的な通史叙述、『倒叙日本史』全一一冊（早稲田大学出版部、一九一三〜一四年）を著わすことになるが、これらの著作の執筆動機に、右にみた歴史の実用性への確信と、それゆえに現代史を重視する態度があったことは疑いない⁶。そして、その態度はまた『歴史地理』に吉田が寄せた多くの論稿にも通底するものであった。

災害史への関心

吉田は『歴史地理』に四十余の論稿を掲載している。取り上げるテーマは、これまで触れたもの以外では、「御塔の瀬戸」（四一三）、「蝦夷島の古名」（二四一一）といった地名の考証や、「新潟、沼垂、蒲原の変遷について」（四一〇）、「江戸の古代地理」（五一三〜五）、「利根川本支変遷考」（六一一・一二、七一二〜四・六〜九）のような地勢の変遷に対する実証的な歴史地理研究が多くを占めていた。

吉田の歴史地理研究における「最大関心事」は、「人間生の興廢盛衰」に関係ある、「實際生存の關係」、「人生に利害關係を結ぶ」ものであったとされる。⁷⁾以下にみるように、吉田がしばしば過去に発生した災害、特に水害の事例を取り上げたのも、災害が人間の「生存」に多大な影響を与える事象だからであろう。例えば「貞觀十一年陸奥府城の震動洪溢」(八一―二)は、『日本三代実録』の記載から、多賀城周辺を襲った「大地震大津浪」(貞觀地震)の規模を推定した論稿であった。

吉田は「治水といふことは人生と離るべからざるもの」と述べ、磐田や河川交通、上下水道そして水害対策など、水との關係を人間の生存にとつて根源的なものと捉えていた(「江戸の治水と洪水」(二六一―四)⁸⁾)。それゆえ、治水と水害の歴史は、「人間生の興廢盛衰」を見極めるためにも、また、歴史的知識を現実に生かすためにも重要なテーマと考えられたのである。以下、この点をもう少し掘り下げてみよう。

一九一〇年の日本歴史地理学会第三回夏期講演会は、山口県の長府と群馬県太田町の二か所での開催が予定されていた。ところが、開催直前の八月、東日本を襲った豪雨により、東海、関東、東北で大規模な水害が発生した。関東地方では荒川や利根川の堤防が決壊するなどして大洪水が発生し、死者・行方不明者八〇〇人以上、五、〇〇〇戸近くの家屋が全壊・流失する惨事となった。利根川に近い太田町周辺の被害も大きく、交通機関も途絶したため、太田町での講演会は中止(翌年開催)となった(「洪水と太田講演会の中止」(一六一―三))。

日本歴史地理学会では、中止となった講演会のかわりに、九月七日、神田一ツ橋の東京高等商業学校大講堂で臨時講演会を開催した(「本会臨時講演会記事」(二六一―四))。右に触れた「江戸の治水と洪水」は、この臨時講演会で吉田が行った講演である。

講演の冒頭、吉田は「此度は目のあたり当地方に於きまして非常な洪水がありまして、随つて際物といふことがた

ま／＼其眞価を發することだらうと思ひます」と述べ、この演題を選んだ動機が直近の水害にあることを明かしている。それに続いて、吉田は「兵なるものは百年も用ゐざるを得べし、併ながら一日も水に備へずんばあるべからず」という「古人の言葉」を引き、人間が生存する上での治水の重要性を指摘した。

既発表の「利根川本支変遷考」の考察を援用しつつ、吉田は関東地方の地形と水流の分析を踏まえて、有史以来、特に江戸開府以降の治水と水害の歴史を辿っていく。時代毎の治水に関する思想や、技術的特徴、水利面などにも目を配りながら、人と水との闘争の歴史を政治体制や社会経済的背景とも関連させて解説し、あわせて、明治政府による東京の治水事業の遅れをも指摘した。

その上で吉田は、右の歴史からいくつかの教訓と「未来」に対する具体的な施策を導き出している。

吉田によれば、治水と利水の関係は「一利一害」、人間がより多くの利益を得ようとすれば、その分、水害の危険性も高くなる。なぜなら、新田開発や河岸地の造成、橋梁の敷設、水源地の山林開発など、河川に関わる開発事業は、「元来、水の領分であつた処を、遠慮なしに侵略するから、水の方でも反抗力を起して、益々水害を大ならしむる」という作用をもたらすからである。⁹⁾ それにもかかわらず、河川行政の状態はというと、近世の川普請が大きな権限を与えられ、公領私領を問わずに実施されたのに対し、現在は担当官庁が「割拠」しており、統一性を欠いている。また、東京など都市住民の防水意識も「田舎の百姓」に比べて低い。文明の発達により水害の危険性はむしろ高まっているのに、それに対する備えは官民ともに「幕府時代の江戸より劣つて居ります」というのが吉田の観測であつた。

このような教訓と問題点を踏まえて、講演の最後、吉田は、集合する川の分流、木曾川のような施設・組織の導入、水の遊滞策、浚渫の拡大など、採りうる治水対策を提案した。そして、末尾では「朝鮮人に対すると同く、

水に益親むと同時に、水の輕蔑を受けぬやうに、大土木を起してやるといふことが、水に対する一番必要なこと」との持論を改めて説き、講演を結んだのだった。この講演は「独り史学研究者のみに止らず、苟も経世利民の智識を得んとする者は一読の価値あり」と評され（『庚戌の歴史地理学界概観』二七一―）、同年の内に、この講演を収録した吉田の単著、『利根治水論考』（日本歴史地理学会、一九一〇年）が刊行された。

吉田は歴史地理学の体系的学問論を記すことは遂になかったとされる¹⁰。だが、大規模災害の発生直後に行われた右の講演からは、そもそも吉田の歴史地理研究は、必要に応じて実際に「応用」しうる実用知という性格が強く、高度の体系性をうちたてることは関心の外にあったと考えるのが妥当であるように思われる。

共有財産としての『大日本地名辞書』

以上のように、歴史の「応用」に注力する吉田にとって、日本歴史地理学会での活動は、史論や歴史研究を通じて、読者・聴衆への啓発に大きな比重が置かれたものとなった。とはいえ、もちろん、吉田にとっての同会は、もっぱら啓蒙の場としてのみあつたわけではない。前節でみた同会を媒介とする「中央史壇」と「地方史家」との双方向性は、吉田の研究をめぐっても現出したのである。

一九〇八年、『歴史地理』が創刊百号を迎えた際、賛成員の久米邦武は、それを祝しつつも、日本歴史地理学会の「地方」への発展が未だに鈍いことを課題に挙げた。久米は「地理の歴史は、各地に住む人が主となりて講究し、更に中央に向ひ客観の批評判断を求むるが相当なり」と述べ、そのような「地方」と「中央」とのサイクルを形成することが、同会の地方的発展のための方途だとした。

この久米の発想は、同会の創立趣旨にも合致するものである。それでは、どうすればそのサイクルは起動するのだ

ろうか。久米が提案したのは、吉田の『大日本地名辞書』を、「地方」と「中央」の交流の媒体とすることだった。

一九〇〇年に刊行がはじまった『大日本地名辞書』は、一九〇七年に一応の完成をみた。同書が吉田の名声と歴史地理学の知名度を一躍高める働きをしたことは前述したが、その反響は『歴史地理』誌上にも多く寄せられ、まず、同書の記述内容から書き出すのが、『歴史地理』に掲載される論稿の典型的な叙法ともなった。

久米も原稿用紙六万枚からなる大冊を一人で書き上げた吉田の「気魄」を高く評価している。ただし、その上で久米が目指するのは、『大日本地名辞書』の達成ではなく、不足である。久米は六万枚といっても一国あたりに換算すれば千枚にも足らず、とても各地の読者を満足させられるものではないといい、さらに、「其内容を細検しなば、遺漏、誤謬は必ず多く、非難は蝟毛の如く起るならん」と内容上の問題も指摘したのである。

しかし、久米は同書の不足を単にあげつらっているのではない。久米は「百号以後は是書に対する不満足と遺漏誤謬とが、必ず各地の人に刺戟を与へ、因て斯学に衝動を生ずるなるべし」として、同書の「不満足」と「遺漏誤謬」が、「各地の人」を同書の修正増補へと駆り立てる可能性に注意を促した。その上で、そのモチベーションを日本歴史地理学会の地方的発展につなげようというのである。久米は同会創立の目的であった「中央」と「地方」との協力関係を、『大日本地名辞書』の「内部の造作粧飾陳列を各地居住人に於て面々適當の當繕をなす」という活動を通じて起動させようと提案したのであった（以上、久米「本誌百号の発刊についての希望」(一一一)）。

『大日本地名辞書』に「多少の誤」が存在することはしばしば指摘され、その修正を求める声も刊行当初からあがっていた（『大日本地名辞書の完成を祝す』(一〇—四)、矢野太郎「歴史地理の発刊第百号に達せるを祝して希望を述べ」(一一—二)等)。そして、吉田自身も、「小生の希望としては補正の材料の四方より日々にはあらはれんことを欲するのみ」（吉田生「丹波の松本氏へ」(四—六)）と、読者からの指摘を受けて記述を修正することに前向きな態度をとっていたのである。

『大日本地名辞書』に対する読者からの誤謬の指摘や情報提供は、目立つものだけでも、「播州龍野近傍の古跡」(三一―¹¹)、松本周馬(丹波)「愚見の二三」(四一五)、T・K「清水城及内城の旧址」(四一六)、南山生(紀伊)「南山放言」(四一八)、大山宏(秋田)「中国の名義に就きて」(五一五)、同「伯耆国会見郡半生郷に就きて」(同号)、藤井甚太郎(熊本)「大日本地名辞書一節の誤謬(筑前池田郷)」(七一三)、後藤秀穂(遠江)「遠江の史蹟研究(大日本地名辞書誤謬の二三)」(二三一六)等々、全国各地から多数寄せられている。右の内、後藤秀穂は遠州地方の郷土史家・考古学者として知られる人物であり、藤井甚太郎は第五高等学校の生徒で、右の論稿を投稿した年に東京帝大史学科国史専攻に入学、翌一九〇六年に日本歴史地理学会の幹事となった。刊行当初は、これらの指摘や報告に対して、吉田が丁寧な謝意を示す場合もあった(前掲「丹波の松本氏へ」)。

もちろん、これら地方会員からの指摘が全て正しなかったわけではない。「中国」の名義をめぐる秋田の大山宏と喜田貞吉の応酬のように、『大日本地名辞書』の記述の妥当性をめぐって、会員間で論争が生じることもあった(前掲「中国の名義に就きて」、喜田「再び中国の名義に就きて」(五一五)、大山「中国に就きて再び卑見を述ぶ 付葦原中国」(五一七))。もともと、先の久米邦武の提言を踏まえれば、このような論争の発生はむしろ望ましいことだったといえる。地域や立場を超えた学問的議論を通じて、歴史研究の場が拡大・発展していくことは、日本歴史地理学会の創立の趣旨にも適ったことだったからである。

一九一五年に死去した藤田明への追悼文で、吉田は『大日本地名辞書』の奥羽の部の材料蒐集に、藤田から多大の協力を得たと記している(「藤田君を懐ふ」(二七―二八))。吉田の独力の成果とされる『大日本地名辞書』だが、その背景には、日本歴史地理学会でつちかった吉田の研究者人脈があったことは明記されてよい。¹² 実のところ、『大日本地名辞書』の記述で、右の指摘を受けて修正された箇所は見当たらない。単純な誤記でも正されていないことから、修

正は物理的に困難だったのだと思われる。それでも、吉田東伍にとつて日本歴史地理学会が、読者・聴衆に対する啓発の場であると同時に、彼らの眼を通じて、自らの研究を検証し、質の向上を果たす場でもあったことは疑いない。そして、その双方向的な営みは、同時に歴史研究の場や研究者ネットワークの拡大・発展にも通じていたのである。

おわりに

一九一七年八月、神戸と米子で開催された日本歴史地理学会で、吉田は「奈良平安及鎌倉時代の山陰道」、「瀬戸内海」を講演予定だった。しかし、子の冬蔵が重篤な病となり、その看病のため吉田はやむなく出講を見あわせた。その際、聴衆への詫びとして、吉田は神戸では自著『瀬戸内海権史論』の残本全てを無償提供し、米子でも『莊園の由来』（『莊園制度之大要』カ）を無代に等しい廉価で希望者に販売した（喜田貞吉「吉田博士を憶ふ」〔三三―四〕）。同じ頃、勤務先の早稲田大学では、次期学長の選任や学内改革をめぐる、いわゆる早稲田騒動が発生しており、吉田は維持員・理事としてその收拾にもあたらねばならなかった。

既に前年から体調に異変をかかえていた吉田だったが、この夏の心労はそれに追い打ちをかけたと思われる。一月一八日の日本歴史地理学会の第百回談話会に、吉田は無理をおして出席し「国栖人に就て」を講演したが（『本会第百回談話会記念大会記事』〔三〇―六〕）、その後、病状はさらに悪化し、翌一九一八年一月二二日、転地療養先の銚子で急逝したのである。

神戸・米子の講演会を欠席した際、吉田は日本歴史地理学会にも謝罪として寄付金を寄せた。厚意を謝しつつも固辞する会の側と、何かに用立てて欲しいとあくまで差し出してくる吉田との間で押し問答のようになり、固辞を続け

るのも失礼ではと会の側で受領を検討していた矢先、吉田の訃報が舞い込んだのだった（大森金五郎「吉田東伍君を憶ふ」〔三一―四〕）。

この年、日本歴史地理学会では、一月の吉田東伍、二月の蜂須賀茂韶、四月の岡部精一と、関係者の訃報が相次いだ。吉田に加え、創立以来、会長として同会の活動を支えた蜂須賀侯爵と、創立発起人の一人であり、長年会務に携わった岡部の死は、同会の活動が一つの節目を迎えたことを印象つけただろう。翌年には、恒例行事として長年好評を博して来た夏期講演会も終了した。

中等教員として各地を転々としながら研究に従事してした沼田頼輔は、一九一一年に東京に戻り、久々に日本歴史地理学会の例会に出席してみると、「列席の会員の顔は全く一変して余の知れるものとは、喜田博士を始め大森君の外は、全く未知の人々であつた」と回想している（沼田「三十年前の回顧」〔五四―六〕）。第一節では、「地方史学会」の活動が中心会員の転任や卒業を境に停滞していったことを論じたが、日本歴史地理学会もまた同様の構造的問題を抱えていたといえる。東京という地の利があつたとはいえ、会務の中心を若手研究者や東京帝大の学生が占める同会の実態は、幹部の異動に活動を左右される不安定なものだった。喜田貞吉でさえ、南北朝正閏問題で文部省を退いた後は、京都や仙台など東京以外での活動が大きな比重を占めるようになるのである。従来指摘されてきた一九二〇年代以降の同会の停滞は、新たな学知の台頭という背景とともに、会員の世代交代という要素も含めて再考する必要がある。

地理学史の側面からは学問的独自性や発展性に乏しかったとされる日本歴史地理学会だが、本論の内容を踏まえれば、同会の本領は、アカデミズム史学の基盤形成という大目的のもと、広義の歴史研究者を包括した点にあり、居所や職業、問題関心を異にする多様な歴史研究者に学問的議論の場を提供し、歴史研究の担い手と領域を拡大した同会

は、史学史上、無視できない独自性と発展性を有していたといえよう。沼田頼輔が「十年間田舎に埋れて居た窮措大即ちポット出の田舎漢が、学界にその存在を認められることになつたのは、実にこの学界の賜」と述べたようにである（前掲「三十年前の回顧」）。

研究傾向についてみても、日本歴史地理学会の営みをアカデミズム史学の単なる延長として捉えることはできず、おそらくは、会員の多くを占める教員層のニーズも反映して、現代史研究や研究成果の「応用」といった独自の関心領域を開拓した。そしてそこには、帝大の外に学問的アイデンティティと拠点とをもち、「応用」を志向するがゆえに実証性を重んじた吉田東伍のような存在があった。

先の回想で、沼田は日本歴史地理学会の現状について「創立当時と今日とを較べると、その内容は著しく進歩はしてゐるが、その活気に至つては、寧ろ往年の方が盛んであつたかと思われる」と評し、自身、同会よりは人類学や考古学の学会に関わることの方が多くなつたと述べている。一九一〇年代後半を境として同会の求心力は明らかに低下していった。

ただし、そこに「歴史地理学から民俗学へ」というような主導的学知の交代劇を想定するのは当を得ない。一九二一年、高木敏雄らによつて日本民俗学会が起こされ、一九一三年にはこれとは別に柳田国男と高木敏雄が雑誌『郷土研究』を創刊したが、いずれもほどなくして行きづまつた。日本民俗学の活動が軌道に乗るのは、一九三〇年代以降をまたねばならない。

民俗学の学会設立の動きについて、『歴史地理』は経営面などから活動維持の困難を危ぶみつつも、概ね好意的に紹介している（「日本民俗学会起らんとす」〈一九一五〉、「郷土研究」の発行）〈二一—三三〉。研究法をめぐり高木・柳田と久米邦武・沼田頼輔らとの間で激しい応酬があつたことは事実である⁽¹³⁾。しかし、日本歴史地理学会の創立趣旨に照ら

せば、方法は異なれど、それぞれの学知が成長し、広い意味での歴史研究が活性化していくのは望ましいことであつたはずである。問題は「歴史地理学」の枠組みでは共軌しきれない新たな学知、新たな世代が、学問状況をどのように刷新していったのか、それらの学知は相互に、そして「中央」と「地方」との間に、どのような関係を取り結び、そこからいかなる歴史像を生み出したのか、生みだしたのかという点にある。日本歴史地理学会という対象を超えるこれらの問題の究明は今後の課題としたい。

※本稿はJSPS科研費(16K16914、及び19K13347)による成果の一部である。

註

- (1) その直後、今泉定介も編集顧問に就任している(「本会記事」(四―三))。
- (2) 『大日本地名辞書』は「新風土記」とまで評価され(矢野太郎「歴史地理の発刊第百号に達せるを祝して希望を述べ」(一一―一)、沢柳政太郎は「思ふに、歴史地理学の名は従来多く世に知られざりしが、吉田氏の大著『大日本地名辞書』によりて俄に世の視聽をひくに至れり」と述べている(「歴史地理第百号の発刊を祝して」(同号))。
- (3) 神戸の講演会では、吉田の代理を内田銀蔵がつとめ「瀬戸内海」の演題で講演している(「神戸講演会記事」(三〇―三))。
- (4) いくつか例示すれば、一九〇九年、「下野協会」の招聘で、栃木県佐野町に出張講演に赴き、翌年には千葉県印旛郡教育会長の依頼で「利根川の変遷及び修治」の講演と同郡の中学校生徒に向けた「利根の治水と墾田」の説話を、さらにその翌年には埼玉県南埼玉郡教育会岩槻支部の懇請で「埼玉県下に於ける利根荒川の変遷」の講演を行っている(「本会委員の応聘出張」(一五―一)、「本会委員吉田博士の出張講演」(一七―二)、「本会の出張講演」(一九―一))。
- (5) この論文は宮西惟助「神代史の新研究と神社制度の革新」(「国学院雑誌」八一・八・九・一二、一九〇二年)のことである。吉田が言及しているのは、その冒頭の一文、

「神代のごときは漠たり察り知るへからずといふがごとき、敬遠的遁辭の下に、漫然これを研究の圏外におきて顧みざりし時代は既に去れり。記紀の二典を以て神聖不可侵の宝典とし、我が太古史の研究は徹頭徹尾其の字句的解釈によるの外、神經不可思議なる古伝説も、偏狭不通なる解釈説も、たゞこれを墨守するのみにして、一点の疑義をさしはさむをゆるさず、一步をも其以外にうつすを以て異端視したる時代も亦過去に属せり。」とあるのを指すと思われる。

- (6) この吉田の試みがいかに挑戦的なものであったのかは、『倒叙日本史』の維新史叙述について、『歴史地理』が「余輩は斯の如きの筆法を以て叙述論評することが、史籍として最良の方法なりといふに同意するを躊躇す。又斯の如きの書が広く世人に読まる、ことの国としての利害如何に就いては、人各見解あるべし」と留保していることから察せられる（『倒叙日本史相ついで出づ』(二二二)）。『倒叙日本史』における現代史重視の姿勢については、今井修「歴史学」(『早稲田大学学術研究史』早稲田大学史資料センター、二〇〇四年)一九八〜九頁をあわせて参照。

- (7) 吉田「安達太郎、吾妻次郎」(八一七)、結城清吾「早稲田大学における地理学の系譜と伝統」(一)——吉田東伍博士と歴史地理学」(『研究年誌』八、一九六三年)。

- (8) 他方で、吉田は山岳については、「人間世の興廢盛衰の大部分は、都府、城市、宮寺、村落、田野、港津等に係つて居ます故に、山嶽は、畢竟するに、歴史方面に、直接に

は、重要でない」とする(前掲「安達太郎、吾妻次郎」)。

- (9) ここで吉田は、「人間の方から水の領分を侵略するから、水も時々我が旧領を取返さうといふので、即ち韓国併合をやりたいといふことになるのであらうと思ひます」と、直前の八月二二日に調印された韓国併合の例え話を持ち出している。この時、会場からは笑声と拍手が交々起つたとされ、自国が隣国を併合するという事態を笑いの種に使つた吉田の語り口調を、千田稔は「慎重さに欠ける」と批判している(千田『地名の巨人吉田東伍——大日本地名辞書の誕生』角川書店、二〇〇三年、二〇九頁)。「日韓古史断」(富山房、一八九三年)の著者であり、「日鮮同祖論」を主張していた吉田が、韓国併合に賛意を示し(『韓半島を合併せる大局面』『歴史地理』臨時増刊、一九一〇年一月)、それを歴史的に正当化する役割を果たしたことは、つとに指摘されるところである。もつとも、この講演の後の部分には「優待せずに、唯、水を虐待して、使ふことばかり考へるから、それで此度、人の日韓併合を機会として、天が斯様な洪水を起すことになつたらうと言へるのであります」等ともあり、吉田が朝鮮半島に対する武断的支配に一定の批判意識をもっていたこともうかがうことができる。足尾鋳山鋳毒事件に関連して当時問題化していた栃木県谷中村の遊水池化政策を、「甚荷息」と評価している点も含め、吉田の「理想」と国策との距離感については、なお、究明すべき要素があるように思われる。韓国併合に対する

吉田の立場については前掲千田（特に終章）を参照。

(10) 前掲結城。

(11) 龍野在住の原貫之助からの吉田東伍宛の書信を掲載した
もの。

(12) 一九〇九年には「樺太」を含む「北海道」、「琉球」、「台湾」を収録した続編が刊行されたが、これは「北海道」の部を藤本慶祐、「琉球」の部を東恩納寛淳、「台湾」の部を伊能嘉矩が分担執筆したものであった（『大日本地名辞書続編』（一五―四））。

(13) 花森重行「歴史地理学という場の崩壊——柳田国男・高木敏雄の久米邦武批判から見えるもの」（『日本思想史研究会会報』二〇、二〇〇三年）。